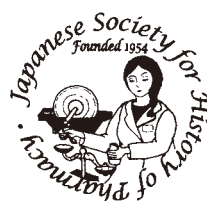


薬史レター

日本薬史学会

J S H P



第 60 号

2011年6月

〒113-0032 東京都文京区弥生2-4-16 (財)学会誌刊行センター内 日本薬史学会事務局
TEL (03)3817-5821 FAX (03)3817-5830 URL <http://yakushi.umin.jp/>

第 4 回薬史学会・柴田フォーラム開催ご案内

企画委員会

この度の東日本の巨大地震・津波によります被災者の皆様には心からお見舞い申し上げます。

薬史学会・柴田フォーラムも、今回で4回目を迎えます。今回は、再び、昭和大学(旗の台)に場所を移し、下記要領にて開催することになりましたので、ご案内申し上げます。

会員各位には奮ってご参加いただきたくお願いいたします。さらに、非会員の方々をお誘いしていただき、議論に加わっていただけますれば幸いです。

記

日 時：2011年8月2日(火) 14:00-17:00

場 所：昭和大学4号館2F201号教室(品川区旗の台1-5-8)
(TEL: 03-3784-8412)

東急池上線または大井町線の旗の台駅東口下車、徒歩5分。

参加会費：無料

懇親会費：当日実費(3千円)

プログラム

- | | |
|---|---------------|
| 受付開始： | (13:30から) |
| 1. 開会挨拶：山川浩司会長 | (14:00～14:10) |
| 2. 話題提供-1：服部 昭先生(薬史学会評議員)
——家庭用樟脳発売の端緒—— | (14:10～14:55) |
| 3. 話題提供-2：山崎幹夫先生(千葉大学名誉教授)
——我が国における“薬害”発生の経緯と医薬品情報学—— | (15:00～16:30) |
| 4. その他 連絡事項など | (16:30～16:50) |
| 5. 懇親会：昭和大学食堂
(TEL: 03-3784-8503) | (17:00～18:30) |

●参加申込・連絡先：塩原仁子(昭和大学薬学部)

TEL：03-3784-8953 FAX：03-3784-8959

●申込締切：会場設営などの関係上、2011年7月26日(火)までにお申し込みいただければありがとうございます。

以上

◆会務報告

2011(平成23)年度日本薬史学会総会

日本薬史学会の2011(平成23)年度総会は、2011年4月16日(土)13時より東京大学薬学部総合研究棟2階講堂において開催された。出席者は43名であった。

宮本法子理事の司会により開会、議長に選出された山川浩司会長から議事録署名人として奥田潤理事、岸本良彦評議員が指名された。冒頭、議長の呼びかけにより、平成22年度に亡くなられた本学会会員である野呂征男、松下正巳、吉原一博各氏ならびに3月11日に発生した東日本大震災の犠牲者に哀悼の意を込めて黙祷が捧げられた。また議長から諸事情により総会後の懇親会は中止する旨の発言の後、議事に入った。



議題として提案された、①2010(平成22)年度の事業報告、②2010(平成22)年度の決算報告、監査報告、③2011年(平成23)度の事業計画案、④2011年(平成23)度の予算案、⑤新役員人事の件(新理事・新評議員の追加補充)、⑥学会運営組織の件(常置委員会委員の追加補充)について審議および報告が行われ、それぞれ承認された。

続いて報告事項として、①日本薬史学会2011(平成23)年会(名古屋)の開催準備状況について河村典久年会長(金城学院大学薬学部)から説明が行われて総会は終了した。

引き続き公開講演会に移り、講演(澁谷達明筑波大学名誉教授)と試写会(長井長義映像評伝)が行われた。

追伸：会場に東日本大震災の被災者へむけての募金箱が設置され、6,511円の募金が集まりました。このご篤志は5月11日付けで、日本赤十字社を通じて被災者の方々へお送りさせていただきました。ご協力くださった皆様にお礼を申し上げます。

日本薬史学会2011年会(名古屋)の概要

岩崎灌園『本草図譜』写本の初公開と、『ドドネウス草木譜』の展示

2011年会

◎日時：2011(平成23)年11月12日(土) 9:30～ 懇親会：18:00～

会場：金城学院大学 W9号館 -106室(大講義室) 名古屋市守山区大森2丁目1723

◎日 時：2011(平成23)年11月13日(日) 10:00～
会 場：西尾図書館・岩瀬文庫

年会長：河村典久(金城学院大学薬学部教授)
主 催：日本薬史学会、日本薬史学会東海支部

年会事務局

連絡先：金城学院大学薬学部教授;野々垣常正

〒463-8521 名古屋市守山区大森2丁目1723 電話：052-798-0180(代表)

電話・FAX送付先(河村)：052-798-7496 E-mail：yakushi@kinjo-u.ac.jp

交 通：金城学院大学：JR名古屋→(中央線・15分)→JR大曾根・名鉄大曾根→(名鉄瀬戸線・15分)→大森金城学院前下車・徒歩5分

西尾岩瀬文庫：交通案内 名古屋から名鉄西尾線『西尾行き』『吉良吉田行き』西尾駅下車(約50分)
西尾駅から タクシー10分又は徒歩20分
岩瀬文庫(<http://www.city.nishio.aichi.jp/nishio/kaforuda/40iwase/index.html>)

【研究発表演題の募集】

一般演題：口頭発表 1演題20分(発表・質疑応答を含む)
ポスター発表

【演題発表申込み方法】

下記の必要事項を記入し、年会事務局にお送り下さい。

演題申込み締切り：2011(平成23)年7月20日(必着)

発表者は、発表申込み時点で日本薬史学会会員に限ります。

FAXの場合：「日本薬史学会2011年会講演申込み書」(様式1)に必要事項を記入して下さい。

- ①発表演題 ②発表者並びに共同研究者全員の氏名(発表者に○)と所属
連絡先：③連絡者の氏名(フリガナ)、④所属、⑤住所、⑥電話番号、⑦FAX番号、
⑧E-Mail(勤務先の場合は所属を明記)、⑨希望発表形式

E-Mailの場合：ファイル添付形式にせず、メール本文に別紙の様式に準じて必要事項を記入し送信して下さい。

- ①発表演題、②発表者並びに共同研究者全員の氏名(発表者に○)と所属、③連絡者の氏名(フリガナ)、④所属、⑤住所、⑥電話番号、⑦FAX番号、⑧E-Mail(勤務先の場合は所属を明記)、⑨希望発表形式

【講演要旨の提出】

下記の要領に従って作成して下さい。

A4用紙を用い、余白は上下左右30mm 標題はMS明朝15ポイント、発表者氏名、所属は12ポイント、本文は10.5ポイントで、必ず枠内に収まるようにして下さい。

要旨提出の締切り：2011(平成23)年9月11日(必着)

【年会参加申込み】

下記の必要事項を記入し、年会事務局にお送り下さい。

FAX の場合：「日本薬史学会 2011 年会（名古屋）参加申込み」（様式 2）の項目をご記入の上、お送り下さい。

E-Mail の場合：添付ファイル形式にせず、メール本文に、別紙の様式の項目に従って記載し、送信して下さい。

- ①氏名（フリガナ）、②会員の別、③所属、④住所、⑤電話番号、⑥ FAX 番号、
- ⑦ E-Mail（勤務先の場合は所属を明記）、⑧懇親会参加、⑨岩瀬文庫、⑩弁当予約、
- ⑪合計金額

事前参加申し込みは、10 月 30 日をもって締め切り、それ以降は、年会当日とさせていただきます。

年会参加費：事前予約した会員の方 4,000 円

年会当日申込みの会員の方 5,000 円

学生 1,000 円

【昼食弁当の予約】

大学構内にコンビニ（セブンイレブン）、職員食堂（生協）がありますのでご利用いただけます。また、大森金城学院前駅周辺には、軽食堂がありますが、必要な方は弁当（1,000 円）の予約を申し受けます。

懇親会：11 月 12 日（土） 18：00 から 20：00 まで

金城学院大学 W7 号館 リリーウエスト食堂

懇親会参加費 5,000 円

学生 1,000 円

※参加費、昼食代並びに懇親会費は、当日会場受付にて徴収させていただきます。なお、予約の取り消しは 10 月 30 日までとしますので、それ以降の取り消しの場合は後日徴収させていただきます。

西尾市図書館・岩瀬文庫探訪

日時：11 月 13 日（日）10：00～

現地集合、現地解散ですが、名鉄西尾駅に集合して、タクシー乗り合いで岩瀬文庫まで案内します。

運賃・料金は各自ご負担ください。参加希望者には集合時間等は追ってお知らせします。

場所：愛知県西尾市亀沢町 480 番地（TEL：0563-56-2459）

ホームページ：<http://www.city.nishio.aichi.jp/nishio/kaforuda/40iwase/index.html>

様式1

日本薬史学会2011年会（名古屋）講演発表申込書

フリガナ ③氏名			
④所属			
⑤ 連絡先住所	〒		
⑥電話		⑦FAX	
⑧E-mail			
①演題 _____			
②氏名（所属） 共同研究者を含めて 発表者に○を付けてください（発表者は会員であること） _____			
⑨希望発表形式 口頭発表 ポスター （希望を○で囲んでください）			

申し込みの送付先 年会事務局：連絡先

金城学院大学薬学部 担当；野々垣常正

〒463-8521 名古屋市守山区大森2丁目1723

電話・FAX送付先（河村）：052-798-7496

E-mail：yakushi@kinjo-u.ac.jp

演題申込み締切り：2011（平成23）年7月20日（必着）

(1) 第58回北海道薬学大会「薬史部門」(報告)

表題の薬学大会は、本レター第59号で予告の通り5月21・22日の2日間にわたり札幌コンベンションセンターにて開催され、2500名を超える薬剤師及びその予備軍が集いました。今年度は6年制薬学教育の完成年度に当るためか、6年生の卒論研究も加わり、演題件数は一挙に増え、ポスター発表だけでも96件に達し過去最高となりました。会場は活気に溢れ、熱烈な雰囲気でも燃え上がって、新しい時代の幕開けを感じさせるものでした。

一方の薬史部門は、10ある大会構成団体の中では一番小さく(通常会員数:45名)、演題を集めるにはいつも苦勞しますが、何とか2題集まりホットしたところです。特別講演では、内藤記念くすり博物館(エーザイ株式会社)の館長、永縄厚雄氏による『病を癒す人とくすりの歴史』と題するユニークなお話を伺うことができ、たいへん勉強になりました。総会では、①「支部会則の改正」(支部会費制度の廃止)、②「当会平成25年会(札幌大会)」の担当、③「支部設立10周年記念事業(平成26年)」の実施など重要事項が承認され、今後数年間は多忙になりそうです。

(2) 日本薬史学会北海道支部・北海道医史学研究会 「第6回合同学術集会」(予告)

今年度の合同学術集会は、晩秋の10月29日(土)、会場はAKKビル(札幌市中央区北10条西24丁目2番)において開催します。今のところ、両会メンバーによる研究発表の演題は公募中で、演題申し込みの締め切りは7月末、講演要旨の方は9月11日です。特別講演は既に決定済みで、演者は日本薬史学会の評議員、服部昭先生による興味深いお話を予定しており、タイトルは「印籠と薬—江戸時代の薬と包装—」です。第1回以来、当支部会員の参加者人数は医史学研究会のそれをいつも上回っておりますが、喜ぶべき傾向であると、やり甲斐を感じます。

第1回集会以来、終了後はいつも懇親会、和気あいあいの楽しい雰囲気の中で医・薬両分野の会員同士が親睦を深めるチャンスとあれば、集会を育てていくことが大事でしょう。

内藤記念くすり博物館 平成23年度企画展

「**病**まざるものなし ～日本人を苦しめた感染症・病気 そして医家～」

開催期間：平成23年4月28日(木)～平成24年3月25日(日)

主催：内藤記念くすり博物館・内藤記念科学振興財団

第4回 日本薬史学会関西支部研修会の報告

日本薬史学会 関西支部世話人 宮崎啓一、多胡彰郎

本年1月の第3回日本薬史学会関西支部研修会に続き、下記案内状のとおり第4回目の研修会を開催いたしました。

今回の研修会におきましては、これまでのご研究の成果として昨年に「印籠と薬—江戸時代の薬と包装—」（風詠社刊）を上梓されました服部 昭先生にご講演いただきました。

本講演では印籠の調査をきっかけとして、江戸時代における薬のある暮らし、医療、薬の供給側の事情などを探索して、印籠と薬、そしてその包装を取り上げていただきました。

当研修会の開催にあたりましては、今回もくすりの道修町資料館館長の宮本義光様のご好意により会場をご提供いただきました。

記

日時：2011年6月18日（土） 研修会：16：30～17：30（懇親会；研修会終了後～19：30）

場所：くすりの道修町資料館 2階会議室 TEL 06-6231-6958

〒541-0045 大阪市中央区道修町二丁目1番8号 少彦名神社（神農さん）内

内容：1. 研修会（話題提供）

講師：服部 昭先生（小西製薬株式会社）

演題：「江戸時代—薬の携帯と包装」

2. 懇親会

研修会終了後～19：30

場所：ダイニングバー「キキ」

事務局よりのお願い

(1) 昨年末より本会の会員名簿作成について、当方送付の質問項目への回答をお願いしておりますが、未だ御返答されていない方は至急事務局宛送付されるようお願い致します。

(2) 薬史レターへの投稿をお待ちしています。

- ・ 薬史に関するエピソード（短編事項）
- ・ 薬学教育および研究に関する話題
- ・ 製薬技術についての歴史と話題
- ・ 病院あるいは街の薬局での薬剤師の業務の変遷などの回想
- ・ 文学作品（詩歌、俳句、川柳など）美術工芸品などにみられる、医薬に関係するもの、薬用植物の記事、図譜、など
- ・ 薬史に関する博物館、史料館や展覧会などの紹介
- ・ 薬史に関する図書の紹介および資料など

以上は薬史レター第41号4頁の投稿のヒントの要約です。

〔新刊紹介〕

湯之上隆、久木田直江 編 「くすりの小箱」～薬と医療の文化史～
A5版 160頁 2011年3月刊 1,800円(南山堂)

本会の理事・奥田潤名城大学名誉教授および2010年薬史学会総会で「薬と倫理学」を講演された加藤尚武京都大学名誉教授が執筆者として加わった「くすりの小箱」という楽しい本が出版された。

本書は、平成18年度から3年間にわたる科学研究費基盤研究(B)「薬の倫理学と薬剤師の倫理プログラムおよび薬の歴史文化論的研究」(代表者松田純静岡大学教授)に集った多領域の10名(薬史学・生命倫理・精神医学・ヨーロッパ文学・日本史学など)による薬と医療の文化史を読み解こうとする共同研究が実ったものである。

第1章くすりの歴史-世界の薬学、第2章くすりの歴史-日本の薬学、第3章くすりの文化と章立されている。その内容は、世界とわが国のくすりの歴史から始まり、近代医療史、治療以外の願望現実医療、薬物依存、薬物治療における倫理と科学、中世・近代ヨーロッパの医療と薬、統合医療など広範囲に及び、アジア諸国で大きな役割を果たした薬師信仰で筆をおいている。そのなかで薬学領域ではお馴染みの神農、ガレノス、フリードリッヒ2世、シェーレ、ザーチュルナー、ペレティエとカヴェントウ、長井長義、正倉院薬物などが簡潔に記され、薬学領域の執筆者だけでは書き得なかった薬の歴史と文化について読みやすい文章で綴られている。またコラムには薬種業の規則、徳川家康と万病丹なども織り込まれ、気軽に読める。

著者らは、編集を務めた静岡大学人文学部の湯之上、久木田両教授のほか、同学部4名の教授が分担執筆し、薬学からは奥田名誉教授のほか古川裕之山口大学医学部薬剤部長教授、渡辺義嗣東北薬科大学教授が加わっている。

本書は「文」と「薬」の垣根を超えて対話の糸口となる新しい試みの著作と思い、一読を薦めたい。
(西川 隆)

〔新刊紹介〕

横田陽子 著 『技術からみた日本衛生行政史』
B5版 231頁 2011年3月刊 3,400円(晃洋書房)

本書は 序章 衛生の科学技術、第1章 化学分析の導入、第2章 細菌学の制度化、第3章 衛生行政における新たな展開、第4章 公衆衛生の「専門職」化、第5章 地方衛生研究所の誕生、終章 科学と社会が交錯する現場としての衛生行政 で構成されている。

著者は滋賀県で公衆衛生行政の試験研究機関に長年勤務した経験に基き、立命館大学大学院先端総合研究科において、近代日本の衛生行政の実務を支えてきた地方衛生研究所の歴史を研究して纏めた。

明治政府が西洋医学を採り入れた当初、海外からの輸入に頼っていた医薬品の品質の確保(「贋薬」の排除)のため1872(明治5)年に長崎に司薬場が設立された。この頃、明治政府で衛生行政を担当したのは、幕末時代から長崎でオランダ人ゲールツに学んだ相良知安と長与専斎であった。司薬場はその後、東京、大阪、横浜にも設置されたが、時代の変遷に従って、現在では国立医薬品食品衛生研究所となっている。

当時、衛生行政は内務省が所管していたが、明治20-30年代には各府県にも試験設備が整備されて、

薬剤師による分析化学検査と伝染病対策としての細菌学検査が二つの柱として運営された。大正時代には栄養学が衛生行政に採り入れられた。第二次大戦に敗れ、連合軍司令部(著者はこの言葉を使わずに、いきなりGHQと記しているが、現在の若者はGHQをすんなり理解できるかとは評者の老婆心であるが)のはたらきかけで、地方衛生研究所の機能が充実されるようになった。100年以上にわたる日本の衛生行政の変遷の歴史が纏められ、参考文献も充実している力作である。

(末廣雅也)

〔新刊紹介〕

「薬と社会をつなぐキーワード事典」編集委員会 編 『薬と社会をつなぐキーワード事典』
A5版 391頁 2011年3月刊 2,381円+税(株本の泉社)

京都府立大学名誉教授、水谷民雄氏が代表として総計31名による分担執筆で“薬学生・薬剤師には必携の1冊!”をキャッチフレーズとして編集されて3月に上梓された。本書には235項目のキーワードが下記15の分野別にまとめられている。

1) 薬と薬学一般 2) 医薬品の開発／臨床試験／承認 3) 医薬品の流通・販売 4) 医薬品の適正使用 5) 薬局／薬剤師 6) 保健・医療 7) 医療制度 8) 医薬品の安全対策／副作用／薬害 9) 医学・医療の倫理 10) 医療・医薬品と情報 11) 疫学・統計処理 12) 食品の安全 13) 環境の安全 14) 法規・基準 15) 機関・組織

国の内外で新たに取上げられるようになったキーワードの数が増して、専門を異にすると正確に理解するのも難しくなっていることを家族からの質問に答えようとする時にしばしば気付くことがある。そのような時にこの事典に目を通すのも解決法になるのではないだろうかとの印象を受けた。

(末廣雅也)

〔新刊紹介〕

木村誠 著 「消える大学・生き残る大学」
朝日新書 229頁 2011年4月刊 740円+税(朝日新聞出版)

データでわかる日本の未来「危ない大学」
B5版 208頁 2011年6月刊 1,200円+税(洋泉社 MOOK)

20世紀末の規制緩和の風潮で、昭和58年設置の摂南大薬学部以降15年間設置されなかった薬科大学(薬学部)の急増設が続いた。大学設置を望む学校経営者とそれに加担する無責任な薬系団体によって急増設された薬科大学(薬学部)は、今、薬学教育六年制を契機として学生定員の大幅割れにより、学校経営に赤信号が灯った大学が十数校になる。週刊誌などで多く取り上げられてきたが、薬科大学関係者のみでなく医療の担い手となる薬剤師の養成について、優良な新設校もある中で、上記の二書は学生定員数50%割れの大学をデータで示した警告書でもある。都市に回帰する傾向と統廃合が今後の課題となるであろう。

(山川浩司)